2024年12月29日（日）降誕節主日朝礼拝説教

『ヘロデとキリスト』　井上隆晶牧師
ホセア書11章1～9節、マタイによる福音書2章13～15、19～23節

❶【キリストと共に新しい出エジプトをしよう】

イエス様が生まれるとすぐにヘロデ王はイエス様を殺そうとします。このヘロデという人は大変疑い深い人で、自分の王位を脅かそうとする人を次々と殺しました。天使は夢でヨセフに告げます。「**起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。**」（マタイ 2：13）そこでヨセフは起き、夜のうちに二人を連れてエジプトへ避難しました。このエジプトへの逃避行は預言されていたことだとマタイは解釈しました。「**『私は、エジプトから私の子を呼び出した』と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。**」（15節）この預言は旧約聖書のホセア書11：1にあります。
ユダヤ教の教師たちの間ではメシアはモーセと似た運命をたどると信じられていました。ヘロデが二歳以下の男子を皆殺しにしたことも、エジプトのファラオが「**生まれた男の子は一人残らずナイル川にほうりこめ**」（出エジプト1：22）と命じた事に似ていますし、エジプトに避難中のヨセフに天使が「**この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった**」（マタイ2：20）という言葉も、ミディアンに避難していたモーセに主が「**さあ、エジプトに帰るがよい、あなたの命をねらっていた者は皆、死んでしまった**」（出エジプト4：19）と似ています。**イエス様の生涯とモーセの生涯とが重ねられて語られていることは明らかです。**つまりこの物語はイエス様による「**新しい出エジプト**」なのです。イエス様は民を導く新しい指導者であり、イエス様と共に旅をするヨセフとマリアは新しいイスラエルとして描かれています。このようにイスラエルの歴史を繰り返すことによって、古いイスラエルの民の不従順を回復しているのです。

●27日（金）の「朝の祈り」をした時、ホッとして心が落ち着きました。主人が帰って来た家は秩序が整います。祈りを通して、神様という主人が心の中に入って来たのです。祈りはこの世から私たちを引き離し、神の国へ連れて行ってくれる最も効果的な方法です。祈る人は、この世から離れることが出来るのです。

聖書が、出エジプト、出バビロンを何度も語るのは、信仰生活とはイエス様と共に天国という約束の地に向かって「この世を出る旅」であることを教えているのです。

❷【キリストを生かすために何度も起きなさい】

ヘロデの迫害の物語は、信仰が芽生えても、その信仰を殺そうとする悪魔的な力が働いていることを教えようとしているのです。ヘロデは皆さんの中に住んでいます。教会に行くのを止めさせようとし、聖書を読むことも、祈ることも止めさ

せようとします。そのままなら皆さんの信仰は死んでしまいます。しかしこの物語は同時に、イエス様を必死に守ろうとした人がいた、ということも伝えています。ヨセフとその母マリアです。ヨセフがどうやってイエス様を守ったかを学びましょう。ここには４回も「**起き上がる**」という言葉が出てきます。「**起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げなさい**」（13 節）、「**ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り**」（14 節）、「**起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい**」（20 節）、「**そこでヨセフは起きて…イスラエルの地へ帰って来た**」（21 節）。彼には夢のお告げに対する迷いは見られません。迷ったのはマリアが受胎した最初の時だけでした。それ以降、彼は夢のお告げを信じてすぐに行動します。「起きる」ということは信仰と希望と復活を象徴しています。「寝る」は死であり、怠惰と絶望を象徴しています。

●ある修道士が、修道院長に相談しました。「罪を犯してしまいました。」修道院長は彼に言いました。「回心して立ち上がりなさい」。修道士は尋ねます。「また罪を犯したらどうしたらいいのですか。」修道院長は彼に言います。「また立ち上がりなさい。」修道士は尋ねます。「それでも罪を犯したらどうしたらいいのですか。」修道院長は彼に言います。「何度でも立ち上がりなさい。倒れては起き、倒れては起き、それを生涯続けなさい。」

高齢者施設におられる平方先生を訪問するといつも信仰書を読んでいます。97 歳になっても学ぶことを辞めません。先生は良く食べます。食べる人は元気です。信仰も同じです。何歳になっても聖書を読み、祈る人は霊的に元気です。

●４世紀のヒッポのアウグスティヌスは言いました。「不完全であっても怖れる必要はない。ひたすら自らを前進させよ。私は不完全であることを怖れる必要はないと言っているのであって、不完全さを愛せよと言っているのではない。あるがままにあれ。不完全さが中にある限り、前進せよ。日毎に加え、日毎に近づき、なお主の身体から離れるな。」

信仰は決断です。自分が治るまで治療を辞めないと決める事です。自分の中にキリストが大きく成長するまで、聖書を読むこと、礼拝する事、祈ることを続けなさい。

❸【悪は必ず滅び、善だけが残る】

父なる神様は、ご自分の独り子であるイエス様が迫害されても、すぐに手を下してヘロデを滅ぼすことをしませんでした。イエス様は殺されそうになって逃げ回っています。何でイエス様はこんなに弱いのだろうと思います。それは今も同じで、教会はこの世の力、疫病の力、悪の力の前で何とも無力に見えます。神はなぜ悪を速やかに滅ぼしてくれないのかと思います。それは、私たちの信仰を試しておられるからではないかと思うのです。ここを読むと「**逃げ**」「**とどまり**」（13 節）、「**去り**」（14 節）、「**引きこもり**」（22 節）といった言葉が並んでいます。前に進むだけが信仰ではありません。時が来るまで逃げ、引きこもり、とどまってい

てもいいのです。ヨセフは牢屋の中に 2 年間閉じ込められ、モーセもミディアン地方に 40 年引きこもり、パウロも 3 年間アラビアに退きました。この逃げている時間、引きこもっている時間をどのように過ごすのかが大切だと思います。
聖書をよく見て下さい。「**ヘロデが死ぬまでそこにいた。**」(15)、「**ヘロデが死ぬと**」(19)、「**この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった**」(20)、と繰り返し「**死んだ、死んだ、死んだ**」と書かれています。ヘロデは必ず死にます。神に敵対する者は必ず滅びます。「**主よ、あなたに敵対する者は、必ず、あなたに敵対する者は、必ず滅びます。**」(詩編 92：10) とも書かれています。
神様はこれらの物語を通して、悪は自滅するから放っておきなさい。どんなに悪の力が強く見えても怖れることはないということを教えているのです。なぜなら悪は存在ではなく、善の欠如の状態だからです。神は善を創造されましたが、悪は創造しませんでした。神から出たものだけが残るのです。これから 33 年後、人々はキリストを十字架で殺し、墓に入れ、封印しましたが、三日目に復活してしまいました。何をしても無駄でした。この方に誰も勝てないのです。人間が神に勝てるはずがありません。そういう方があなたの中に住んでおられ、そのお方の命をあなたは持っているのです。敵は私に何もできません。だから恐れてはなりません。

●河井道（みち）は恵泉女学院の創始者ですが、このように言っています。「キリストは金曜日に十字架にかけられ、次の日は墓の中に横たわって何事も起こらず、彼の敵は彼を笑った。しかし、彼が死人の中からよみがえられた第三日目があったのである。この世には幾日かの間、人には何事も成し遂げられていないかのように見える日々があるし、私たちクリスチャンは十字架にかけられ、死んで葬られたと考えられがちである。もしかすると、現在のこの日々がそういう日々かもしれない。しかし、私たちには第三日目が与えられていると、私たちは信じる。この第三日目が、私や私の仕事のためにさえも、とっておかれているのだと、私は信じている。」

「悪」をこの世から無くそうと努力するよりも、キリストを絶対的に信頼する信仰を養うことです。悪をなくすことは不可能です。悪があっても大丈夫、神の方が、善の方が、命の方が強いと知ることです。悪の力が大きく見えるならあなたは不安に支配されるでしょう。しかしキリストの力が大きく見えるなら、あなたは平安に支配されるでしょう。あなたの中のキリストを大きく成長させることだけを考えましょう。平安の秘訣はそこにあります。